

志筑忠雄の通詞退役と仕官活動

大島, 明秀
熊本県立大学文学部 : 教授

<https://hdl.handle.net/2324/6792816>

出版情報 : 熊本県立大学国文研究. 68, pp.21-37, 2023-06. 熊本県立大学日本語日本文学会
バージョン :
権利関係 :



国文研究

第六十八号

(2023・6)

熊本県立大学日本語日本文学会

志筑忠雄の通詞退役と仕官活動

大島 明 秀

志筑忠雄の通詞退役と仕官活動

大島 明 秀

はじめに

主に科学史的視座から進められてきた志筑忠雄（姓中野、通称忠次郎、名盈長、号柳圃、一七六〇—一八〇六）研究は、近年新たな段階に入り、そのオランダ語理解や和訳の精度¹、あるいは生活背景である実家・中野家の所在と間取り、さらには同家の長崎での社会的位置まで究明された²。しかしながら、依然として志筑をめぐる謎は少なからず残されている。

その一つは、志筑忠雄の阿蘭陀稽古通詞を辞した時期で、退役の理由も定かではない。

いま一つは、西洋人や西洋の学問に対して侮蔑や批判的な表現を示す一方で敬意や尊重の念を抱いている様子が見られたり、さらには通詞を退役しておきながら晩年に仕官を希求する心境が見られたりするなど、一見整合性が取れていないような一連の言行をいかに理解するべきかという

問題である。

以上を説明すべく、本稿は、志筑忠雄が稽古通詞を辞職した年時の特定を中心の課題としつつ、退役に至る諸問題を整理検討するとともに、その行動原理を朱子学的発想から理解することを提起する。

一、稽古通詞の退役

（一）通詞退役の年時

志筑忠雄は、三井越後屋の長崎での落札商人であった三代中野用助の五男忠次郎として生を享けた。三代中野用助は、中野家の経営戦略から、貿易関係情報の入手のために地役人株を購入し、成長した三男・伊三太を薬種目利に、そして忠次郎を阿蘭陀通詞に就けたと見られる³。

忠次郎が志筑家に養子に入り、同家八代として稽古通詞

となつた時期について、長崎の郷土史家渡辺庫輔は、「己酉龍太書上由緒書」に基づいて「安永五申年、養父「志筑孫次郎」跡職被仰付、稽古通詞罷成、全六酉年病身罷成候ニ付、御暇奉願、文化三寅年七月九日病死仕候。」という記述を翻刻している。当該翻刻史料によつて、忠次郎、すなわち志筑忠雄は安永五年（一七七六）一七歳にて稽古通詞に就任、翌年に辞職したものと長らく考えられてきた。ところが、近年、新史料が発掘され、相次いで右の退役年に疑問が呈された。その第一は、原田博二の発見で、天明二年（一七八二）の内容と推定される「地役人分限帳」に「志筑忠次郎」の名が見えることを根拠に、少なくとも同年まで通詞であつたことを指摘した⁶。

それでは同年に忠次郎（志筑忠雄）が編んだ「天文管闕」（一七八二年八月序）の序文を取り上げてみよう。

然ルニ^モ思ハ^ハ一旦得^レ病^ヲ蟄^ニ居既ニ^ニ經年、支^ニ体猶^ラ未^レタ^ラ平^ラ焉。毎^ニ懷^{ツテ}身無^{シテ}寸^ニ分^ノ功^ヲ空^ク辱^ムルコトヲ^ニ公禄之重^ヲ而不^レ暇^ラ太息^ニ。是故ニ^ニ保^ニ養^ノ之^ノ暇^ニ則^チ必^ス訳^シ紅^ニ毛^ノ之^ノ語^ヲ、聊^カ以^テ解^ス憤^ヲ悶^ヲ也（「然るに思はずに一旦病を得て蟄居既に年を経るも、支体猶未だ平らかならざるがごとし。毎に身に寸分の功無きを懷い、空しく公禄の重を辱むること、

太息に暇あらず。是故に保養の暇あれば則ち必ず紅毛の語を訳し、聊か以て憤悶を解くなり」⁷

思いがけなく罹病し、それが原因で体が思うようにならず、数年間蟄居の身であることが記されている。そして、療養の時間があれば必ず蘭書翻訳をし、しかもこの行為によつて「憤悶を解」いていたという。

右の発言から、吉田忠は、由緒書の記述と原田の議論を踏まえた上で、「蟄居」という言葉から安永六年に志筑忠雄は「病身」から辞職願を出したものの「預かり」扱いとなつていたのではないかと推察し、さらに体調の回復がおもわしくなかつたであろうこと、「公禄の重を辱むること」への恥辱に耐えられなかつたであろうこと、翻訳・研究への没頭を決意したであろうことなどを推測し、天明二年に完全に辞職したとする見解を示した⁸。

右の原田・吉田説を覆す可能性を秘めた第二の発見は、「オランダ商館長日記」に基づいたイサベル・田中・ファン・ダーレンによる指摘である。忠次郎（志筑忠雄）の跡を襲つた次三郎は、これまで安永六年に通詞に就任したと考えられていたが、同氏は、天明六年五月二八日（西暦一七八六年六月二四日）に、次三郎が商館長へ稽古通詞となつたことを報告に参上したとする記述を拾い上げ、そこから、そ

の時点まで忠次郎（志筑忠雄）が通詞として登録されていた可能性を示唆した⁹⁾。

これらの発表によつて明らかになったことは、「己酉龍太書上由緒書」の怪しさとも言えよう。なお、必ず史料の写しを作る渡辺庫輔の旧蔵書（長崎歴史文化博物館蔵渡辺文庫）に「己酉龍太書上由緒書」の原本や転写本が存在せず、さらに全体の内容が「長崎通詞由緒書」¹⁰⁾とほぼ一致することから、「己酉龍太書上由緒書」の志筑氏由緒書部分は、志筑龍太により作成されたと渡辺庫輔が推定し、かような題を付して著作『阿蘭陀通詞志筑氏事略』に引用した可能性が高い¹¹⁾。いずれにせよ、「己酉龍太書上由緒書」（長崎通詞由緒書）の記載は疑つてかかるべきである。

ここで「天明乙巳」「五年」三月望日（十五日）肥崎陽晩生志筑盈長叙」との年紀・署名が認められる「鈎股新編」（長崎歴史文化博物館蔵）に着目する。本書は上巻しか現存していないが、その序、題言ならびに上巻の内容から、ジョン・キール『天文学・物理学入門』蘭語版¹²⁾を底本として平面三角法を訳した一書であることが判明している¹³⁾。その盈長の名を用いた志筑自序に次のような興味深い一文が認められる。

今猥侍紅毛訳司之後、是以得略通彼數書之旨也（『今

猥りに紅毛訳司の後に侍し、是を以て彼の數書の旨を略通じ得るなり）¹⁴⁾

「猥」は自己を謙遜する言葉で、「後」とは下級の位、「侍」は仕えることを意味することから、現代語訳すると、「今いかかわしくも阿蘭陀通詞の下役として仕えており、そういうわけでキールの数学書の内容をおおよそ理解することができた」と述べているのである。つまり、この一文は、「今」、すなわち天明五年（一七八五）三月一日時点で忠次郎（志筑忠雄）が稽古通詞であったことの証言なのである。さらに、忠次郎（志筑忠雄）にとつて通詞社会に在ることに旨みがあったことも分かり、また、「天文管闕」に見られた屈辱感に満ちた自虐的な発言が確認できないことから、この頃までに志筑が現場復帰していたことが窺える。

続いて、天明五年十一月一日から翌年三月二十六日まで長崎に遊学した大槻玄沢（一七五七—一八二七）の文章に目を移そう。玄沢は滞留中の日録や見聞を「瓊浦紀行」および「寄崎次第」に記している。ただし、「瓊浦紀行」が日記であるのに対し、随筆「寄崎次第」は、書中に玄沢江戸帰府後の天明七年に稽古通詞となった小川猪之助の名が見えることから、長崎で得た情報に新たな情報を加え更新したものと思定されることには留意せねばならない。

さて、玄沢は阿蘭陀通詞の名簿を「寄崎次第」に掲載しており、そこには阿蘭陀通詞目付、大通詞、小通詞、小通詞助、小通詞並、小通詞末席、小通詞末席見習に次いで稽古通詞二十五人の名が記載され、その中に「志筑忠次郎」の名は見当たらず、「志筑次三郎」のみ認められる。稽古通詞二五名は就任の早い順に並べられていることを踏まえ、以下、次三郎の就任時期を絞り込むために、前後の人名を記し、その就任年を山括弧で補って示す。

稽古通詞「…」森山儀助（天明四年）、志筑次三郎、品川友三郎（不明）、松村武十郎（不明）、西吉太郎（天明六年）、小川猪之助（天明七年）「…」¹⁵

「オランダ商館長日記」を繙くと、稽古通詞としての森山儀助の初出は天明四年九月二三日（西暦一七八四年一月五日）であることから、それより少し前に就任していたものと思われる。次三郎の就任時期は、儀助と天明六年に稽古通詞に就いた西吉太郎の間、すなわち天明四年九月頃から同六年に絞られる。ただし、特に理由がない限り、稽古通詞に就任してから報告に参上するまで半年以上もの時間が空くのは不自然と言わざるを得ない。

天明六年五月二八日当時の商館長はヨハン・フレデリッ

ク・ファン・レーデ・トット・デ・バルケレール (Johan Frederik van Reede tot de Putelaar) で、前年の一〇月二一日から翌天明六年一〇月三〇日（西暦一七八五年十一月二二日）一七八六年一月二〇日）まで在職していた。次三郎が天明五年一〇月二一日以前に稽古通詞に就任していたとすると、前商館長に新任の報告をすることはあっても、バルケレールに行う必要はない。他方、一〇月二一日以降の年内就任であったならば、商館長は正月から江戸参府に出発して長期不在となるため、直ちにバルケレールに報告していたであろう。そうになると、やはり次三郎は天明六年、参府で商館長不在の間に通詞に就任し、五月の長崎帰着を待って報告に参上したと見るのが妥当である。

それでは、ここまでの考察を踏まえて忠次郎（志筑忠雄）の退役および次三郎の就任を整理すると、次の二つの可能性に絞ることができる。

(A) 天明五年三月一五日以降、同年内に忠次郎退役、翌六年に次三郎就任。

(B) 天明六年に忠次郎退役、同年に次三郎就任。

改めて前に掲げた「西龍太書上由緒書」（「長崎通詞由緒書」）の文言を検討すると、辞職年時を示す「全六四年」

が誤っていることは既に見た通りであるが、内容ではなく史料の「記載」が誤っている可能性が考えられる。同史料において九代次三郎の稽古通詞就任年時は「安永六酉年、養父「志筑忠次郎」跡職被仰付、稽古通詞罷成¹⁰」とあり、明らかに時期を誤っている。これは先代忠次郎（志筑忠雄）の記載と辻褄を合わせたことによるものであろう。すなわち、次三郎の就任が天明六年となれば、忠次郎（志筑忠雄）の辞職年時を記した「全」「安永」六酉年病身罷成候二付、御暇奉願」の「全」は、史料作成時か転写時のどこかの段階で誤って伝わったもので、本来は「安永」ではなく、「天明」であったのではなからうか。

ところで、「瓊浦紀行」によれば、大槻玄沢は長崎滞在中に忠次郎（志筑忠雄）と四度接見しているが（天明六年一月一二日、二月二日、二月十五日、三月九日）¹¹、いずれも「中野」ではなく「志筑忠二（郎）」と、「志筑」姓でその名を記している。一方で、前述したように、「寄崎次第」に掲載される稽古通詞の名簿には、忠次郎（志筑忠雄）の名はなく、次三郎の名のみ記されている。さらに地役人株の存在を考えると、両名が同時期に「志筑」姓をもって並立するような事態はありえない。ただし、前述したように、「寄崎次第」は江戸帰府後に新しい情報を交えて作成されたと見られるため、「瓊浦紀行」と噛み合わない記載があっ

ても特に不思議ではない。

いずれにせよ、玄沢は後年「蘭訳梯航」（一八一六成）で、忠次郎（志筑忠雄）との交遊を回想しているが、初めて接見したくだりは「天明五六年ノ際、彼地ニ遊ビシ頃、彼人偶々翁ガ寓居（「本木良永宅」）ヲ訪ヒ、翁モ亦彼家ニ到リ¹²」と記している。当該記述を信用するならば、最初は忠次郎（志筑忠雄）側が出入りし、「偶々」天明六年一月一二日以前に出会ったことになる。仮に忠次郎（志筑忠雄）が既に「病身」で無職となっていた場合、阿蘭陀小通詞助であった本木良永の居宅に「偶々」訪問するような軽率な行動は慎んだであろうし、良永宅で「志筑」姓を名乗ることも控えたであろう。

ここで忠次郎（志筑忠雄）の研究活動に注目してみると、天明二年八月から同五年までは毎年精力的に一点か二点の訳書を仕上げるような体調に回復した。前に示したように、「鈎股新編」序で、自身が阿蘭陀通詞の下役として勤めていることを証言しており、少なくとも天明五年三月一日時点で稽古通詞であったことは間違いなく、また、「鈎股新編」序には「天文管闥」序で見せたような屈辱感に満ちた自虐的な発言は認められず、さらに翌年春に大槻玄沢と数度接見している様子からしても、忠次郎（志筑忠雄）は現場復帰も果たしていたものと目される。

一方、天明六年（一七八六）からは一転して動きが止まり、寛政五年（一七九三）一二月に「混沌分判図説」というごく小さな論考を著すまで、実に約八年間、「火器発法伝」（天明七年四月）という短編を除けば、訳書・著作の完成を見ることはなかった。その背景に天明五年冬か翌六年春頃から病状が悪化したことを想定すると、退役理由が「病身」であることにも筋が通る。加えて、中野家の経営戦略からすると親類縁者に通詞を有しておきたいことは間違いない、にも拘らず中野家が忠次郎（志筑忠雄）の実家への出戻りを許したのは、やはり稽古通詞を継続しえないような体調となったことが背景にあったと見られ、その際、地役人株の売却または譲渡先の見通しが立ってから辞職させたことは想像に難くない。

以上を勘案して、前に掲げた（B）、すなわち八代目忠次郎（志筑忠雄）は天明六年（の五月二十八日以前）に退役し、同年（の五月二十八日まで）に九代目次三郎が就任したと考える¹⁹。

（二）退役の背景

志筑忠雄の稽古通詞退役の背景には、「病身」以外の事も少なからず存在している。

まず、志筑忠雄が稽古通詞を勤めていた頃の通詞の役職

とその配置状況について見ておこう。時代によって異なるが、前掲の「寄崎次第」によれば、通詞は目付と大通詞を筆頭に、以下、小通詞、小通詞助、小通詞並、小通詞末席、小通詞末席見習、稽古通詞、稽古通詞見習、内通事と続く。志筑が勤めた稽古通詞は二五人もの在職者が認められる一方、その一つ上の役職の小通詞末席見習は一人しかいないように、昇進できるのは僅かな人数であった。そこから四段階ほどの昇任を経て小通詞、さらには大通詞にまで上り詰めるとなると、一方ならず狭き門であった。とりわけ安永・天明年間は大体的にほとんど異動がなく、「稽古通詞」のまま通詞職を終える人物も出てくるなど、家柄の良い者を除いて通詞社会は出世の見通しが立たない閉塞的な状況であった。当時志筑家からは大通詞が出たこともなく、出世を考えると絶望的な状況であった。

次に、志筑忠雄が勤めた「稽古通詞」の職務内容を見てみよう。幼少期に通詞を勤めた石橋政方（一八四〇～一九一六）の経験が聞き書きとして伝わっている。

もとより十歳にもならぬ子供の事で、何が何やら一向に分かりもしなかったが、それでも朝早く出勤して、上役の人々がしきりにチークパーク²⁰というのを呆れて聞いていた²⁰。

政方の証言を信用する限り、「稽古通詞」は「口舌」をもつて立ち回る必要はなく²¹、その職務内容は、「十歳にもならぬ子供」が通詞の仕事をただ見ているだけの、文字通り子ども扱いの仕事であった。時には商館長に会話の練習をつけてもらう機会もあったようだが、あくまで初歩の内容にすぎなかったようだ²²。

かような能力不要の閑職に志筑忠雄は一七歳から二七歳まで十年間勤めた。周囲より随分年長で稽古通詞となったことに相当の屈辱感を覚えたであろうし、その後もかような職務では各種の訳書で見せた才能や学識を発揮する機会もなく、また、家柄と人間関係だけが要の通詞社会ではその能力が評価されることもなく、蘭書に接する旨みはあっても、挫折の日々であったことは想像に難くない。

さらに、「稽古通詞」の志筑が観察していた通詞という仕事の本質は「商人的な役人」であった。大半の通詞は知的好奇心を持って西洋の学問に取り組むどころか、正確なオランダ語の通訳・翻訳でさえも眼中になく、ただ自身の立場に利があるように弁舌を巧みに使い分けたり、都合に応じて原文とは異なる訳文を作成したりして御用をこなしつつ、利権を活用して儲けを得ることを主眼としていた。

ところで、前に引用した「天文管闕」序の最後部に「是故ニ保^ニ養^ス之^ノ暇^ニ則^チ必^ズス^ニ訳^シ紅^ニ毛^ノ之^ノ語^ヲ、聊^チ以^テ解^ス

「憤悶^ヲ」也（『是故に保養の暇あれば則ち必ず紅毛の語を訳し、聊か以て憤悶を解くなり』）と認められるが、何と志筑忠雄は療養の時間には必ず蘭書翻訳をし、しかもこの行為によって「憤悶を解」いていたというのである。志筑の「病氣」が運動機能の疾患が原因であれば、同年同月に「天文管闕」と大部の「万国管闕」との二作を書き上げたことや、翌年以降の精力的な翻訳活動の説明がつかない。よってその「病氣」は精神疾患に因るものと考えるのが自然である。ともあれ、不世出の才能と並々ならぬ蘭学への情熱を持ち、さらに次章で述べるように学者としての然るべき地位と職務を求めた志筑忠雄は、「稽古通詞」という仕事、そして「通詞」としての将来に嫌気がさしていたことが、「病身」とともに通詞退役の背景に存在していた²³。

二、朱子学的発想から読み解く志筑忠雄——西洋に対する眼差しと仕官活動——

志筑忠雄は西洋の学問に魅了され、その生涯の大半を蘭書翻訳に費やしたが、一方で西洋に対する批判的あるいは侮蔑的な表現を残すこともあった。

例えば、二三歳時に著した「天文管闕」（一七八二年八月序）の序文冒頭には「華夷雖^{トモ}レ異^リ而人^ハ情^ハ一也」（『華夷異なると雖も人情は一つなり』）と記しており、そ

の他「天文管闕」全体を通して、「蛮語」、「蛮書」、「蛮説」、「蛮方」、「蛮人」という言葉を用いている。さらに、二六歳時の著書「鈎股新編」（一七八五年三月序）では、その序題を「紅夷算術鈎股新編序」と付したほか、西洋人を「被髮之人」と表現し、これはすなわち『論語』で野蠻の象徴とされた「被髮」（髪を振り乱すこと）を指すが、かような国には「有君臣有父子、而無忠孝之教、有武備有法律、而無礼楽之化（『君臣有りて父子有るも忠孝の教無く、武備有りて法律有るも礼楽の化無し』）」と、忠孝の教えや礼楽が無いことを説く。いずれも伝統的な華夷思想に基づいて言葉が綴られていることは明らかである²⁴。

さらに「天文管闕」と同年同月に編んだ「万国管闕」では、西洋の植民地活動や略奪について記しており、「終国々ヲ奪フ故ニ属国多シ。至テ悪ムヘク恐ルヘキノ甚シキ者ナリ²⁵」と批判し、西洋人の性質を「其人物甚残忍不慈而モ西洋ヲ最甚シトス。惣シテ邪蘇諸国ノ人氣情至テ殺伐ニシテ国ヲ治ルニ猛威ヲ主トス。故ニ其楽哀テ其礼和セス²⁶」と述べている。また、前掲の「鈎股新編」序でも、『旧約聖書』のアダム（亜当）とノア（納亜）に触れ、子孫が四大陸に広まったことに言及し、日本が今に至るまで「納亜孫子」とならなかったのは、偶然ではなく、「得専万国之秀也（『専ら万国の秀を得るなり』）」であるからだとする²⁷。

吉田忠の言うように、若き志筑忠雄は確かに保守的な思想の持主とも言えるが、むしろ一般的な華夷思想の範囲内での発言でもあり、思想と言うよりは志筑が有していた学問と、訳官（役人）としての立場に対する強い意識から、かような表現となったとも考えられる。

ここで華夷思想に基づいた表現が散在する「鈎股新編」の凡例に相当する「題言」に注目すると、志筑忠雄は、典拠とした『天文学・物理学入門』蘭語版の著者キールを「極西・西・天・使・国ノ人、奇・児・氏」と記している。「極西」は日本から西洋を眼差した謂であるが、著者キールに、一方方ならない（珍しい、不思議である、優秀である）という意を含んだ「奇」字を当て²⁸、加えて、序題で「紅夷」とした出身国イギリスを、題言では「天使の国²⁹」とする（本文でもニュートン「Isaac Newton」を「天・使・国ノ人」としている）。少なくともこれらの言葉遣いは華夷思想に基づかない中立的な表現で、敬意や尊重の念まで含まれていようである。

そもそも志筑忠雄は「世界の複数性」を理解していた³⁰。二十代中葉に編纂したと推定される『海上珍奇集』に注目してみよう³¹。本書はブリニウス『五巻博物誌』蘭語版³²の抄訳であるが³³、その序に次のような文章がある。

大既世俗之心、其見ル所ヲ信シテ其不見所ヲ不信。然
トモ、天下之広大成中ニ無異物哉。夫万物之生スルヤ、
千シ緒ヲ万端ニシテ各不同。是ヲ以或ハ如虎、又孔雀
之如ク、彩色之物有リ。人モ又不一成。譬ヘハ万国言
語各別ツ成ルカ如シ。依之觀是、物皆不奇成ハ無シ³⁴

現代語訳すると以下のようになる。

「世俗の人は、その目で見たものを信じ、見ていないもの
は信じない。しかし広大な世界にあつて、異物（知らない
もの）がなかろうか。（広大な世界には）様々な生物が
生まれるが、千緒万端であつてそれぞれ異なる。そういわ
うわけで、あるものは虎のようで、また、孔雀のようで、
色彩豊かなものもある。例えて言へば、世界各国の言語が
異なっているようなものである。このことを踏まえて考え
れば、物には全ておかしいものはない。」

ここには、相対的な観点から「世界の複数性」が述べら
れているが、志筑忠雄が晩年に著したと見られる『四維図
説』にも³⁵、日本と西洋の学問を相対的に比較した発言が
確認できる。

予按ニ、総シテ数理ノ目ヲ論ルニ及テハ、和漢トイヘ
トモ西國ノ細密ナルニシカズ。盛衰盈虚ノ道理ヲ論ス

ルニ及テハ、彼遙ニ我下ニアリ。然レハ彼カ学ハ天ノ
形氣ニ於シ、此ガ学ハ天ノ命理ニ於シ、彼ハ巧ヲ重シ、
此ハ妙ヲ重スルコト知ヌベシ³⁶

志筑忠雄は西洋の天文学や計算の緻密さが和漢に勝るこ
とを認めており、一方で、和漢が西洋より優れているのは、
盛衰盈虚の道理など天の命理を知る術だとする。とにかく、
ここには志筑の西洋の学問に対する敬意や尊重が見て取れ
るが、前に見た華夷思想との関係において、いかに理解す
べきであらうか。

志筑忠雄の学問・教育基盤を構築した明和から天明期の
状況を考えると、やはり朱子学の文脈から読み解く必要が
あろう。例えば、半生を費やして後年完成させた『暦象新
書』（一八〇二年一〇月）は、ニュートン物理学書であるキー
ル『天文学・物理学入門』の訳書であったが、物質・粒子・
引力など力学の基本概念を朱子学（宋学）の「氣」の概念
で志筑が再解釈したものであった³⁷。

とにかく、朱子学の立場からすると、蘭学は朱子学（漢
学）と対等に並立する一つの学問分野ではなく、あくまで
朱子学に内包しうるものであった。西洋の学問を研究する
ことは、つまりは朱子学の「格物致知」の一環であり、ひ
いては（修身齊家）治国平天下」に繋がる営為であった。

そう考えると、西洋に対して、華夷思想的な蔑視や植民地活動への批判を有しながら、その学問に敬意や尊重の念を抱いていた発想の説明がつく。つまり、かような朱子学的発想を根底に、志筑忠雄は「格物致知」の発想から「夷」である西洋の学問の優れた点を認め、「治国平天下」の志を抱いてその研究に生涯を捧げたのである。

ところが、通詞を退役した天明六年（一七八六）以降は、「二三歳時の著作『天文管闡』で「保・養之暇、則必ス訳シ紅・毛之語ヲ、聊以テ解ス憤悶」也（『保養の暇あれば則ち必ず紅毛の語を訳し、聊か以て憤悶を解くなり）』と述べたような、楽しみとしていた翻訳活動もままならないほどの体調となったようである。才能に対する矜持の傍ら、「毎ニ懷ツテ三身無シテニ寸・分之ノ功ニ空ク辱ムルコトヲニ公禄之重」而不レ暇ニ太息（『毎に身に寸分の功無きを懷い、空しく公禄の重を辱むること、太息に暇あらず』）という想いは、年齢を重ねるにつれ、一層強くなったに違いない。ようやく訳書を成したのは、寛政七年（一七九五）年二月の奥書を有する小冊の「阿羅祭垂来歴」であった。ファレンティン『新旧東インド誌』³⁸の抄訳である本書は、ロシアから通商を求めて来日した使節ラクスマン（Adam Krillovich Laksman）の根室来航（一七九二年九月）を受けて訳出された。内容はロシアが東方に進出した来歴を描

いたくだりを訳出したもので、途中、シベリアを併有した経緯や、ロシアと清朝中国が国境を画定したネルチンスクでの会談の経過も記されている³⁹。

三六歳の志筑忠雄が海外情勢という新しい分野の翻訳に取り組みだした背景には、再仕官に対する強い願望が存在したと見られる⁴⁰。ただし、志筑が希求したのは、通詞への再任ではなく、古代の儒学者あるいは荻生徂徠のように、幕府や藩に拔擢され、「治国平天下」に導く「格物致知」的な学問と教授を行う、いわゆる藩儒やそれに類する学者のポストと考えられる⁴¹。そのため、「一介の商家中野「姓」ではなく、既に籍を失っていた阿蘭陀通詞「志筑」姓を署名したのであろう。寛政一〇年（一七九八）夏に完成を見た「オクタント之記」にも「志筑」姓を用いており、航海技術の摂取のみならず、海外情勢察知の一環として訳出したものと目される。

そして享和元年（一八〇一）八月、志筑忠雄は四二歳にしてケンペル『日本誌』蘭語版⁴²の附録第六編の論文を「鎖国論」と題して訳出した。ケンペル『日本誌』は西洋における日本観を知る上で最重要文献であり、しかも附録第六編は、日本の対外関係について論じるとともに、日本が有する各種の優秀性とも言える条件を述べた内容であった。年齢と体調から考えると、志筑忠雄にとって仕官への願

いを込めた最後の仕事で、本の重要性や訳出部分の内容から言っても自信作であったはずである。

原文を忠実に訳した「阿羅婆亞來歴」や「オクタント之記」における翻訳姿勢とは異なり、「鎖国論」訳出にあたっては、自身の翻訳へのこだわりを殺し、原文の文脈を損なう形で、華夷思想に基づいた言葉と時折排外的な文章や注を織り交ぜた訳文を綴った。その姿勢に鳥井裕美子は志筑がナショナルな文脈での日本中心的思考を有していた可能性を見ているが、そうではなく、その背後に志筑忠雄の学問の根底にあった華夷思想と、そしてそれ以上に、平戸藩への登用の期待から、ないしは平戸藩主松浦静山を通じて幕府や藩主などの有力者に「鎖国論」が読まれ、そこから仕官の声がかかることを意識して成稿した事情を想定すると、その翻訳姿勢が理解できるのである。

おわりに

最後に本稿で得た成果を総括しておく。

まず、志筑忠雄の退役の年時と背景を解明した。三井越後屋の長崎での御用達であった落札商中野家は、安永五年（一七七六）に地役人株を購入して同家三代用助の五男忠次郎（志筑忠雄）を阿蘭陀通詞志筑家の養子に入れ、同人は志筑家八代として稽古通詞となった。「天文管闕」序に

は天明二年（一七八二）八月時点で数年間病氣のために蟄居していたという発言が認められ、よって同年以前の数年間は休職扱いであったと推察される。

しかしながら、「天文管闕」と「万国管闕」を成した天明二年八月以降の状況は一変し、同五年までに次々と翻訳を成し遂げうるような体調に回復した。その間の訳書の一つ「鉤股新編」序では、自身が阿蘭陀通詞の下役（稽古通詞）として勤めていることを証言しており、ここから少なくとも天明五年三月一五日時点で志筑忠雄が稽古通詞であったことは疑いない事実となった。同序には「天文管闕」序で見たような屈辱感に満ちた自虐的な発言は認められず、さらに、翌年春に大槻玄沢と数度接見している様子からして、現場復帰も果たしていたものと目される。

ところが、天明六年から約八年間翻訳活動が停滞しているところを見ると、天明五年の冬から翌六年の春あたりに再び病状が悪化しだし、地役人株の売却あるいは譲渡先の見通しが立った天明六年の五月二十八日までに、「病身」を理由として志筑忠雄は稽古通詞を退役し、同年次三郎が志筑家の跡を襲ったものと見られる。

その他、通詞退役の背景には、安永・天明期における出世の見通しが立たない通詞社会の閉塞的状況が存在した。加えて、不世出の才能と並々ならぬ蘭学への情熱を持ち、

学者としての然るべき地位と職務を求めた志筑忠雄にとつて、稽古通詞の仕事と通詞としての将来はとても満足できるものではなかったことに留意すべきである。

次に、志筑忠雄の言動を朱子学的発想から理解することを提起した。志筑は世界の複数性を理解し、西洋の学問に敬意を抱きつつも、その学問の根底にあった華夷思想から西洋を眼差していた。朱子学の立場では、蘭学は朱子学（漢学）と対等に並立する学問ではなく、あくまで朱子学に内包しうるものであった。西洋の学識を研究することは朱子学の「格物致知」の一環であり、ひいては「修身齊家治國平天下」に繋がる営為であった。そう考えると、西洋に対して、華夷思想的な蔑視や植民地活動への批判を有しながら、その学問への憧憬や敬意を抱いていた発想の説明がつく。

さて、天明六年（一七八六）の稽古通詞退役の後、短編「火器発法伝」の成稿を除けば、八年ほど志筑忠雄の翻訳活動は停滞した。次に完成を見たのは、ファレンティン『新旧東インド誌』の中からロシアが東方に進出した来歴を描いたくだりを訳出した小冊の「阿羅祭亜来歴」（一七九五年二月）であったが、その訳出背景には、ロシアから通商を求めて来日した使節ラクスマンの根室来航（一七九二年九月）が存在した。

三六歳の志筑忠雄が海外情勢という新しい分野の翻訳に取り組みだしたのは、再仕官を強く願望していたことによるものと見られる。ただし、志筑が希求したのは、通詞への再任ではなく、幕府や藩に拔擢され、「治國平天下」に導く「格物致知」的な学問と教授を行う、いわゆる藩儒やそれに類する学者の官職と考えられる。そのため、一介の商家中野「姓」ではなく、既に籍を失っていた阿蘭陀通詞「志筑」姓を署名したのであろう。

そして享和元年（一八〇一）八月、志筑忠雄は四二歳にして「鎖国論」を訳出した。底本としたケンペル『日本誌』は西洋の日本観を知る上での最重要文献であり、しかも附録第六編は日本の対外関係について論じるとともに、日本が有する各種の優秀性とも言える条件を述べた内容であった。年齢と体調から考えると、志筑忠雄にとっては仕官への最後の願いを込めた仕事で、本の重要性や訳出部分の内容から言っても自信作であったに違いない。

原文を忠実に訳した「阿羅祭亜来歴」や「オクタント之記」における翻訳姿勢とは異なり、「鎖国論」訳出にあたっては、自身の翻訳へのこだわりを殺し、原文の文脈を損なう形で、華夷思想に基づいた言葉と時折排外的な文章や注を織り交ぜた訳文を綴った。背景に志筑忠雄の学問の根底にあった華夷思想と、そしてそれ以上に、平戸藩への登用

の期待から、ないしは平戸藩主松浦静山を通じて幕府や藩主などの有力者に「鎖国論」が読まれ、そこから仕官の声がかかることを意識して成稿した事情を想定して、その翻訳姿勢を理解すべきである。

「鎖国論」をもってしても仕官が叶わなかった志筑忠雄は、翌年に半生を費やした「曆象新書」（一八〇二年一〇月）を完成させた。その一年後、「三角提要秘算」⁴⁵（一八〇三年一〇月）では「中野」姓を用い、以降、死没する半年前に病床からの口述筆記にて成稿した「二国会盟録」（一八〇六年一月）を除いて、「志筑」姓を名乗ることは無かった⁴⁶。また、享和三年冬頃から病弱でひ弱な体質を意味する「蒲柳の質」の謂を振ったと目される「柳圃」号を用い、門人の育成とオランダ語文法論を中心とした翻訳・執筆活動を展開するが、そこに見えるのは仕官の念願叶わず諦念に至った晩年の姿であった。ロシア使節レザノフ（Nikolai Petrovich Resanov）の長崎来航（一八〇四年九月—一八〇五年四月）を受け、中野柳圃（志筑忠雄）は再び「志筑」姓を名乗った「二国会盟録」（一八〇六年一月）を病床から口述で成すも⁴⁸、体調は回復せず、同年七月八日⁴⁹、この世を去った。

注

1 拙稿「蘭文和訳論の誕生—志筑忠雄「蘭学生前文」と徂徠・宣長学—」（『雅俗』第一八号、二〇一九年）。同「和解」から「翻訳」へ—Beschryvinge van het octant en dezelfde gebruikの訳出に見る本木良永と志筑忠雄—」（『熊本県立大学文学部紀要』第八二号、二〇二三年）など。

2 拙稿「志筑忠雄の背景としての実家・中野家—家屋の敷地・通詞株・長崎社会での位置—」（『文彩』第一九号、二〇二三年）。
3 前掲拙稿「志筑忠雄の背景としての実家・中野家—家屋の敷地・通詞株・長崎社会での位置—」、一六—一七頁。
4 史料・写本は鍵括弧、印刷物は二重鍵括弧で示す。以下同。
5 渡辺庫輔『阿蘭陀通詞志筑氏事略』（長崎学会、一九五七年）、三一—三三頁。

6 原田博二「阿蘭陀通詞志筑家について」（『蘭学のフロンティア—志筑忠雄の世界』、長崎文献社、二〇〇七年）。
7 原本は焼失したため、底本は大崎正次「曆象新書」天明旧訳本の発見」（『科学史研究』第四・五号、一九四三年）、一〇一頁を用いた。引用の際、旧字・異体字は常用漢字に改めた。以下、全ての引用文で同。また、底本の調点は見やすい位置に移動させた。なお、書き下し文を後続させたが、原文の調点にこだわらず、意味が取れるように作成した。以下、「天文管闕」引用の際は同。

8 吉田忠「志筑忠雄—独創的思索家—」（W・ミヒエル、鳥井裕美子、川島真人共編『九州の蘭学—越境と交流—』、思文閣出版、二〇〇九年）、一〇二—一〇三頁。

9 イサベル・田中・ファン・ダーレン「オランダ史料から見た長崎通詞—志筑家を中心に—」(前掲「蘭学のフロンティア—志筑忠雄の世界」)。

10 「長崎通詞由緒書」は、「長崎県史」史料編第四(吉川弘文館、一九六五年)所収の翻刻を使用。八二七—八二八頁。

11 この点、織田毅氏の御教示による。

12 *Inleiding tot de waare Natuur- en Sterrekunde. Gescheven door John Keil in het Latijn en vertaald in het Nederlands door Johan Lulofs. Te Leiden, by Jan en Hermannus Verbeek. 1741.*

13 小林龍彦「中野忠雄輯『三角算秘傳』について」(『鳴滝紀要』第一〇号、二〇〇〇年、八—一〇頁)。

14 「鈎股新編」序。底本は長崎歴史文化博物館蔵本を使用。読点の位置は原文に従い、書き下し文は筆者が作成した。以下、「鈎股新編」引用の際は同。

15 「寄崎次第」上(「磐水先生随筆」第四卷(第五卷と合冊)、早稲田大学図書館蔵)。読点は筆者による。以下、句読点の付されていない原文を引用する際は適宜筆者が施した。なお、森山儀助、西吉太郎(『西吉郎右衛門』)、小川猪之助の稽古通詞就任年時は、イサベル・田中・ファン・ダーレン「阿蘭陀通詞家系図(Ⅲ) 小川・森山家」(『日蘭学会会誌』第二八巻一号、二〇〇三年)および前掲「長崎通詞由緒書」、八二〇頁。

16 前掲渡辺庫輔「阿蘭陀通詞志筑氏事略」、六五頁。

17 「瓊浦紀行」(「磐水先生随筆」第三卷、早稲田大学図書館蔵)。このことは吉田忠が既に指摘している。「大槻玄沢、玄幹父子の西遊と志筑忠雄」(『長崎談叢』第五九輯、一九七六年)。

「二頁。ただし、二月一日は「志筑」とのみ記載されるので、(別家) 志筑孫兵衛等、別人を指す可能性もある。

18 「蘭訳梯航」下巻(二八—二六成。底本は「洋学」(日本思想大系六四、岩波書店、一九七六年)所収、松村明校注を使用)。同書、一二頁。なお、読点の位置は底本に従った。

19 享和三年(一八〇三)に長崎遊学し、志筑忠雄との接見を果たした大槻玄幹(一七八五—一八三八)は、後年著した「蘭学凡」(一八一六年成写本。早稲田大学図書館蔵)の附言で、末次忠助からの聞き書きとして「是ヨリ先二病ヲ以テ本務ノ訳司ヲ辞シ、一室三間居シテ他人ノ応接ヲ避ケ、嘗テ志ス処ノ西書二耽ル事廿年一日ナリ」と記している。ここで「廿年一日」を額面通りに受け取れば志筑忠雄は天明三年(一七八三)退役となるが、忠助はあくまで大まかな年月を言ったものと思われる。

20 初出は石橋思案「福地の叔父様(桜痴居士の少年時代)」(『少年世界』第一二巻第二号、一九〇六年)。上田は「私の史料探訪2—石橋家の人々」(上田英三、二〇〇四年)に収録したものを参照。引用文は二八五頁。

21 大槻如電は、長崎の町医師・吉雄圭斎からの伝聞に基づいて「俗事に迂、且つ口舌の不得手なるため、同僚の侮辱を招いたことが稽古通詞を辞した理由としているが、如電説には根拠がなく推測の域を出ない。大槻如電原著、佐藤榮七増訂『日本洋学編年史』(錦正社、一九六五年)、二二九頁。また、拙稿「志筑忠雄の所用印ともう一つの字(あざな)」(『文彩』第一六号、二〇二〇年)、一〇頁。

22 片桐一男「阿蘭陀通詞の研究」(吉川弘文館、一九八五年)「底

本は一九九七年第二刷を使用)、五一―五四頁。

23 本節は前掲拙稿「志筑忠雄の背景としての実家・中野家―家屋の所在・建物配置・長崎社会での位置―」第二章に基づいているが、同論考では志筑忠雄の通詞在職年時が天明二年までか天明六年までかを決定せずに論を進めたが、天明六年退役と定めた本稿では論旨を変更している部分がある。

24 前掲吉田忠「志筑忠雄―独創的思索家」、一〇三―一〇四頁。

25 「万国管闡」第一八項。底本は長崎歴史文化博物館蔵本を使用。項目の順次は、拙稿「志筑忠雄「万国管闡」の文献学的研究」(「雅俗」第一七号、二〇一八年)表2に従った。

26 「万国管闡」第二二項。

27 前掲吉田忠「志筑忠雄―独創的思索家」、一〇四頁。

28 「求力法論」(一七八四年一月)ではケイルを「計意留(流)」と表記しているが、これも数理に優れた意を表現した謂と見られる。京都大学附属図書館富士川文庫蔵本、研医会図書館蔵本、筑波大学附属図書館蔵本、ならびに東北大学附属図書館狩野文庫および平山文庫蔵本を確認。

29 漢語で「天使」は、「天の使い」(「史記」「趙世家」)、「天子の使い」(「資治通鑑」「唐紀」)などを意味し、この場合キールやニュートンの出身国を尊重した表現と言える。ただし、志筑忠雄は「キリスト教の国」を意味するためにかように表現した可能性もある。いずれにせよ、華夷思想に基づいた侮蔑的な謂ではない。

30 吉田忠「心遊術から「世界の複数性」へ」(前掲「蘭学のフロンティア―志筑忠雄」)。

31 底本は国立国会図書館蔵本を使用。同本では著者名が「志築長盈」(本来は「志筑盈長」となっているが、転写過程で誤記されたものと見られる。いずれにせよ、現存する資料で志筑忠雄が最後に「盈長」を名乗ったのは、「鈎股新編」(天明五年「一七八五」三月一日)であることから、少なくとも天明五年前後までに編まれた一書と見られる。

32 Gaus Plinius Secundus: *Des wild-vermuerden natuorkondighes vyf boeken*. 志筑忠雄が底本としたと目される平戸藩築栄堂文庫本は、¹ Amsterdam. By Dirck Dircksz. 1662 版。

33 アニック・ミト・ホリウチ「海上珍奇集」における人間と動物をめぐる言説」(前掲「蘭学のフロンティア―志筑忠雄」)、九四頁。

34 「海上珍奇集」巻之一の冒頭より。

35 津市図書館稲垣文庫蔵本に「中野忠雄撰」と記名されており、「中野」姓を用いていることから晩年の著作と判断した。

36 「四維図説」(衆動一貫訣西説)より。底本は津市図書館稲垣文庫蔵本を主とし、静嘉堂文庫蔵本で確認した。

37 前掲吉田忠「志筑忠雄―独創的思索家」、一〇五―一〇六頁。

38 François Valentyn: *Oud en nieuw Oost-Indien*. Te Dordrecht. By Joannes van Braam; Te Amsterdam. By Gerard onder de Linden. 1724-26.

39 拙稿「志筑忠雄「阿羅婆迦来歴」の訳出とその書誌」(「雅俗」第二二号、二〇一三年)、三七―三八頁。

40 志筑忠雄には「飛卿」という字があり、そこから自身を晩唐の詩人温庭筠(飛卿)に見立てたことが窺える。温庭筠は詩

才がありながらも素行の悪さから官職に就けず、生涯野にあった人物である。前掲拙稿「志筑忠雄の所用印ともう一つの字」、二頁。

41 W・J・ボートは「鎖国論」を読み解き、志筑忠雄の執筆動機について「かりそめに彼は外交特別顧問に立候補した、というふうにも読み取れるのではなからうか」と述べている。「鎖国論」からみた18世紀の世における日本 日本における18世紀（前掲「蘭字のフロンティア—志筑忠雄」）、八〇頁。

42 Engelbert Kaempfer: *De beschryving van Japan*, 2 druk, 1733.

43 鳥井裕美子「ケンベルから志筑へ—日本賛美論から排外的『鎖国論』への変容—」（『季刊 日本思想史』第四七号、一九九六年）。なお、岩崎奈緒子は、幕府に対する平戸藩松浦静山蔵洋書の貸借や、幕閣の中樞にあった若年寄堀田正敦（一七五五—一八三二）と静山との私的な繋がりの深さといったことから、「鎖国論」の訳出を、ロシアの通商要求を受ける必要が無いことを、静山を介して幕府に提言することを意図した志筑忠雄の政治的行動であると憶測する。しかしながら、そもそも志筑忠雄が商家に蟄居した無職の人物で、松浦静山からは一方的に蘭書訳出の命が下るだけの分際であったことを踏まえると、志筑側から幕府や平戸藩に対して積極的な政治的な働きかけを企図することは到底考えられない。『近世後期の世界認識と鎖国』（吉川弘文館、二〇二一年）、二二—二五頁。

44 前掲拙稿「和解」から「翻訳」へ—*Beschryvinge van het oost en deszelfs gebruik*の訳出に見る本木良永と志筑忠雄—」、七八頁。

45 拙稿「志筑忠雄『三種諸格』の資料的研究」（『鳴滝紀要』第二八号、二〇一八年）、一三頁。

46 底本は日本学士院蔵本を使用。

47 前掲拙稿「志筑忠雄の所用印ともう一つの字」（『文彩』第一六号、二〇二〇年）、一二頁。

48 「二国会盟録」は志筑忠雄の口述を福岡藩士安部龍平（一七八四—一八五〇）が筆記して成稿した。訳述の契機は、ロシア使節レザノフの長崎来航で、この事件を受け、ロシアとの新たな国際関係の樹立を余儀なくされるだろう日本の速くない未来を予見した志筑忠雄は、ネルチンスク条約に着目し、平戸藩楽蔵堂文庫のブレウオ『旅行記集成』（Antoine François Prevost d'Exiles: *Historische Beschryving der Reizen*, 1741-6）を底本に関係部分を訳出した。なお、ネルチンスク条約は、清朝中国が、ロシアとの国境画定のために、アジア初の経験となる近代国際法に基づいて締結した条約で、つまり、未来の日本がロシアと新たな関係を樹立する局面を迎えた際の参考となるような情報提供を試みた仕事であった。鳥井裕美子「鎖国論・『二国会盟録』に見る志筑忠雄の国際認識」（前掲「蘭字のフロンティア—志筑忠雄の世界」）、拙著『蘭学の九州』（弦書房、二〇二二年）、七五—七六頁。なお、中野家は福岡出身とする見解（松尾龍之介「志筑忠雄の実家—中野家に関するノート」『洋学史研究』第二六号、二〇〇九年）があり、少なくともレザノフ来航の際、実家中野家の前に福岡藩の警固が置かれたことからしても、中野家と福岡藩との関係の深さが示唆されている。これらを勘案すると、志筑忠雄は安部龍平を通じて福岡藩

で読まれることを期待して「二国会盟録」を口述したものと見られる。

49 死亡日時は「光永寺過去帳」に基づいた。古賀十二郎『長崎洋学史』上巻（長崎文献社、一九六六年）、三三〇頁。なお、「己酉龍太書上由緒書」（『長崎通詞由緒書』）には七月九日とあるが、確認してきたように、信頼を置くことができない。

【付記】 本稿には織田穀氏、平岡隆二氏との議論から得られた成果が盛り込まれています。毎度のことながら、両氏の学恩に心より感謝します。